



TITLE:

# 暦法の發達と政治過程 - 漢代を中心に -

AUTHOR(S):

新井, 晉司

---

CITATION:

新井, 晉司. 暦法の發達と政治過程 - 漢代を中心に -. 東方學報 1990, 62: 31-67

ISSUE DATE:

1990-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/66721>

RIGHT:

# 曆法の發達と政治過程

——漢代を中心に——

新井 晉 司

はじめに	三二頁	(1) 太史への諮問
一 太史の通常業務	三五頁	(2) 集議への諮問
二 漢代の改曆と政治過程	三八頁	(3) 廷議の參議者
三 曆法と上奏	四四頁	むすびにかえて
四 曆法と諮問	四七頁	五八頁

## はじめに

『尙書』堯典に云う、「昊天に欽み<sup>つつし</sup>若<sup>したが</sup>い、日月星辰を曆象し、民に時を敬授す」と。この句は、中國における曆の理念をあざやかに物語っている。すなわち、中國の曆にはその歴史全體をつうじ、天子が天の意を體現化し、萬民に規準となる時をあたえるという觀象授時としての役割が要請されてきたのである。ところが、この理念のもとに、實際に各王朝や歴史の舞臺で演じた曆の役割となると、それは時代とともに變化してゆき、曆にもその時代固有の思想性や政治狀況が影をおとす。

前漢では、秦にかわり漢があらたに天命をうけたことを萬民に告げる目的で、太初改曆が武帝のときにおこなわれた。

このときの改暦の指導原理は、皇帝みずから天命をうけ新王朝を樹立したことを明らかにするために、暦、服色、官制などを改めるとする受命改制説と、王朝の交代の周期を五行に結びつけた五徳終始説であった。太初改暦の前後にもたびたび改暦が提唱されたが、それらの場合にも一貫してこの二説がよりどころとされたし、もっとも積極的にこれらの説を援用して自己の地位を確立しようとしたのは王莽であろう。ところが、後漢になると、光武帝は前漢を繼いで漢を中興したために、新暦の布告をただちに新王朝の樹立に結びつけるこれらの説はもはや通用しない。後漢の改暦は、天象と暦のあいだに生じた一日餘りの齟齬をただすことを第一の目標として實行されるが、ただたんに暦の誤りをただすだけでは、百官を納得させることができない。そこで、あらためて改暦の指導原理として讖緯思想が導入されることとなった。元和二年（後八五）、章帝が改暦の詔のなかで『春秋保乾圖』をひいて「三百年にして、斗曆憲を改む」と告示したように、改暦のよりどころを聖王は三百年で法典を改めるとする緯書に求め、長年にわたり使用された太初暦を改める必要があると説く。しかし、この理由づけも後漢四分暦を後漢王朝の暦法として、衆人に認めさせることはできなかったようで、さらに暦と緯書の附會を推し進めた改暦の動きが、後漢全般のみならず北朝をつうじてもおきてゆく。

暦をその王朝の象徴として位置づけるからには、暦がたんに科學的精密さをそなえるだけでは、人々の共鳴を得るのにはむずかしい。そこに天體の運行を知る道具としての性格をこえ、暦を文化的に解釋する餘地を生じ、政治、思想、宗教との交流のきっかけが生まれる。南北朝末期から唐初にかけては道教や佛教の活動が改暦に反映し、北周の天和暦（甄鸞撰）と唐の大衍暦（一行撰）が佛教僧の手により、隋の開皇暦（張賓撰）と唐の戊寅暦（傅仁均撰）が道士の手により編まれた。大衍暦と象數易、元の授時暦と朱子學の關係もまた思想と交流があった暦の代表に數えられよう。

こうした交流が生まれてくるのはなぜか。その答えのひとつは、とりもなおさずその歴史全體をつうじて、つねに爲政者や官僚、知識人が暦法に關與するからである。それでは、暦の撰者でもなく、また一部の人物をのぞいて撰者とも親交

のなかったかれらは、いったいどのような機会をつうじて自己の考えを曆に反映させるのであろうか。改曆が政治的なものとして位置づけられ、國家制度のなかで實現される公的事業であるからには、個人的發言あるいは小集團内のコミュニケーションだけではまったく不十分と言わざるをえない。やはり、效果的にかれらの意見を公表する公的な場がなければならぬ。この疑問の答えとしてだちに思いつくのは、太史局、司天臺、欽天監などとよばれた國立天文臺の存在である。二千年にわたり、國立天文臺が天文學者や天文儀器・觀測資料を管理し、それを國家が統轄してきたことは、たしかに皇帝や官僚の干渉が曆におよんだことを示唆する<sup>2)</sup>。だが、この制度のもとに集まる人々はしばしば天文臺を中心とした人物にかぎられ、その機能も官僚制のなかで決められた職責の範圍をこえないのがふつうである。天文臺の活動を包括したうえで、もっとはひろく意見を吸い上げ、新たな時代の到來を告げる曆の制作を可能にするような制度がなければならぬ。それが、ここに取り上げようとする天子の制詔である。

天子の制詔と天文学の活動、兩者は一見して奇異な取り合わせである。しかし、中國においては、改曆をはじめ新たな計算術や觀測法の採用、天文儀器の製造など天文学の公的活動のすべてが、臣下の上奏と天子の制詔によって進められており、この進行の過程がそのまま中國の制度化された科學活動となっているのである。あまり注意されてこなかったことだが、正史の律曆志に記載されている曆法自體はもちろんのこと、時刻制度、觀測法、天文儀器などの多くが、上奏によって社會的に公開され、最終的に制詔により認可されたものである。たとえば、漢の漏刻が詔によって規定され、干支と番號を附された令により整理されていたことは、「令甲第六常符漏品」(『續漢書』律曆志中)がたしかな證據となっている<sup>3)</sup>。と同時に、全國の時刻制度を統一するために、詔で命じて、同一規格の漏刻の箭を毎歲上京して會計報告をおこなう上計吏をつうじ地方の官廳に配布していたこともわかる<sup>4)</sup>。

いうまでもなく、天子の制詔は中國における法の源泉である。皇帝が立法をおこない諸々の政治問題について最終決定

を下すまでには、行政上の決まった手続きがあり、一定の官僚が關與する。新曆はかならず上奏をつうじて天子のもとにとどけられ、ついでその曆にまつわる問題が専門の天文官や公卿などの官僚に諮られ、検討され協議された。曆法といえども一般の法令とおなじように制詔により規定されるのである。じつは、この制詔が發布される政治過程にこそ、時代の思想をはじめ爲政者の意圖、儒教的價值觀などが曆に入り込む契機があった。上奏があつてから制詔が發布されるまでには、多くの官僚、天文官、爲政者、知識人の評價をうけねばならず、ときに百官を一同に會し、支持派と反對派がかれらの面前で曆の優劣を議論をした。その結果、官僚らの價值觀が曆の形成に反映し、上述のような思想性を兼備した曆が登場することになったと考えられる。のみならず、逆に官僚の價值觀や思考パターンになつた曆理論が登場してくることさえも起こるのである。

本稿のねらいは、曆の諸問題が政治の場でいかにして解決されるのか、また新しい知識や儀器の導入はどのような手続きをへて實現されるのか、その政治的過程を明らかにすることにある。上奏と制詔からなる政治過程をつうじて、爲政者や知識人が實際にどのように曆に關與してきたのか、その具體的なありさまを明らかにしたいと思う。さらにこの作業をつうじて、中國天文學の特質を浮き彫りにするとともに、二千年にわたり停滯することなく不斷に上昇しながら、ついに近代科學へと接續しなかつた中國天文學の祕密の一端も垣間見ることができらるであらう。逆にまた、この政治過程を整理することは、民間の天文學を官に取り込んでいった仕組みをも浮かびあがらせるであらう。なお、漢代を中心に取り上げたのは、この時代に曆と政治制度のひとつの典型的な關係が認められ、それは基本的には後世にも引き繼がれたと考えるためである。

## 一 太史の通常業務

中國天文學のはなばなしい成果が見られる改暦や、暦理論・計算術・天文儀器の導入などがおこなわれる政治過程を検討するまえに、太史の通常の業務がどのように發議されて施行にいたるのか、その過程を検討しておく必要がある。しかしながら、およそありきたりの日常の事實ほど歴史記録に残りにくく、太史の通常業務としてその例外ではない。百官志などから職掌の規定が知られるものの、史書から具體的に日常の活動をうかがうことはほとんどできない。唯一、『史記』三王世家のつぎの記事を指摘できよう。

太僕兼御史大夫事務取扱の公孫賀が、おそれながら申し上げます。太常の趙充の言うには、卜占したところ、四月二十八日乙巳になれば、諸侯王を立ててもよろしい、とのことでございます。わたくしはおそれながら輿地圖を奏上し、立てる國の名をたまわりたく存じます。儀禮はべつに奏上いたします。わたくしはおそれながら請願いたします。<sup>(5)</sup>

右は、太常の趙充が卜占した吉日の結果を上言し、それにもとづいて太僕で御史大夫事務取扱を兼ねる公孫賀が、武帝の三人の子を王に封ずるように請うた上奏文である。ここで問題としたいのは、史料に太史の名が見えていなくとも、實際には吉日を卜占したのは太史の官屬であり、その上申をうけて太常が公孫賀に上言したにちがいない、という點である。太史令の直屬上司は禮儀・祭祀を掌る太常であり、しかも太史令の職掌について、

天時・星曆を掌る。およそ歲末がちかづいたら、新年の曆を奏す。およそ國の祭祀・喪・娶の事には、良日および時節の禁忌を奏することを掌る。およそ國に瑞祥・災異があれば、これを記録することを掌る。<sup>(6)</sup>

という。三王世家の記事は、この三つの職掌のうち、二番目の良日を奏する職務にしたがって上申したものであろう。漢

代の制度一般からいって、太史からの上申が太常と御史大夫をへて、皇帝に上奏されたと思ひなして差し支えあるまい。

ところが、右の推定を確認できるだけでなく、太史と皇帝を結ぶ命令系統をよりたしかに證明する史料が出土している。それは元康五年（前六一）詔書冊の復元として有名な居延漢簡である。この漢簡からは、通常の太史の業務のみならず、漢代の詔書の形態、御史大夫の機能、詔書の諸官廳への傳達方法など、當時の政治機構を明瞭にうかがうことができる。以下に論を展開するためにも漢代の文書政治の仕組みを確認しておく必要がある。大庭脩氏の考證にもとづきや詳しくこの漢簡の内容をのべることにしよう。<sup>⑦</sup>漢簡は全體で八本からなっており、最初の第一簡から第三簡までが詔書、第四簡から第八簡までは執行命令書で、御史大夫が詔書を丞相に下し、以下、次を追って下達文書が丞相府から中央・地方の下級官廳をへ、居延地區の末端の軍組織にまで通達されてゆく。詔書の内容は、太史丞が建議した夏至の日の決定と、それにちなんだ井戸さらえや火種を改めること、夏至の前後五日を休みとするなどを命じたものである。いま、最初の三つの簡を引用すると、

御史大夫の丙吉がおそれながら申し上げます。丞相の魏相が上った太常の蘇昌の書に申すに、「太史丞の定が申すには、元康五年五月二日壬子の日は夏至にあたりますので、兵事を寝め、大官は井を抒み、水火を更め、鳴鶏を進めるよう、請願し奏聞いたします。關係者に布告していただきたく存じます」と。●わたくしが謹んで考えますに、比原宗御者（意味不明）、水衡都尉は大官の御井を抒み、中二千石、二千石は官におのおの抒ませ、別火官は夏至に先だつこと一日に、火を取る木を改新して火種を取り、中二千石、二千石の官の長安・雲陽にあるものに授け、その民みな受け、夏至に古い火種をかえ、庚戌より兵事を寝め、政務を聴かないことを甲寅まで五日としたいと考えます。わたくしは布告していただきたく、わたくしはおそれながら奏聞いたします。制して言う、よろしい。<sup>⑧</sup>

御史大夫の丙吉の上奏文は第一簡と第二簡からなる。つぎの第三簡には皇帝がその上奏文を承認したことをしめすことば

が「制して曰く、可なり」とのみある。この第一簡から第三簡に見られるように、漢代の詔書は、臣下の上奏文と皇帝がその上奏を認可したことをしめす制可が合して、そのまま詔書になるという。ところで、わたしがここで問題としている太史の職務については、御史大夫の上奏文のなかに解答がはっきりしめされている。上奏文の構成はつぎのとおり。太史丞の定は元康五年五月二日壬子が夏至にあたるので、兵事をやめ、井戸さらえをし、水火を改め、鳴鶏を進むことを直屬上司の太常に建議し、太常はそれを丞相に上書した。丞相は太常からの文書を御史大夫に進達し、御史大夫はその文書をもとに皇帝に奏上をおこなう。ここまですべての内容で、黒丸からあとは、夏至にかかわる行事を實行するためにより詳細な實行案を具申した御史大夫の意見となっている。御史大夫については従来より監察官として考えられてきたが、漢簡などの研究から、じつは皇帝の最高祕書官ともいうべきであり、政策の具體的な實行の手筈をきめる仕事をし、大綱をのみを指示する丞相を助けていたという<sup>9</sup>。三王世家の記事もまた、公孫賀は太僕としてよりもむしろ、御史大夫の職責にしたがって太常からの上言を皇帝に奏上したのであらう。

ここに引いた漢簡もまた、祭祀・喪・娶にあたりその良日と時節の禁忌を奏する太史の職掌にふくめてよからう。太史の通常業務の場合、委任されている職掌にしたがって發議した建議書は、太史↓太常↓丞相↓御史大夫↓皇帝と上達され、御史大夫の上奏に皇帝が制可をあたえれば、上奏文がそのまま詔書となり、今度は逆に詔書が御史大夫↓丞相↓中央や地方の關係官廳へと傳達されていくことがわかった。ただ依然として、こうした通常の業務が太史の組織内部でどのように處理されたかは明らかにしがたい。しかし、曆の問題がいかなる過程をへて處理されるかという當面の問題の検討には、ここにのべた行政系統が明らかになっただけで充分であらう。通常業務の場合の政治過程が確認できたところで、太史の日常的な職掌と對極に位置し、臨時の事業である改曆の場合を取り上げることになろう。



## 二 漢代の改暦と政治過程

改暦のころみは前漢・後漢ともにそれぞれ數回づつ起っているが、實際に新しい暦が施行されたのは、前漢では武帝の太初元年(前一〇四)、後漢では章帝の元和二年(後八五)である。どちらもよく知られた改暦であるが、暦と政治過程の關係を把握するには都合がよいので、まずは兩者を取り上げてみよう。

前漢は高祖以來、秦の暦をそのまま蹈襲していたが、太初元年になって太初暦を施行した。そのときの様子は『漢書』律曆志上に詳しい。ここでは改暦にいたる手続きがわかればよいので、原文の引用を避け、適宜符號を附して要約しよう。

A 改暦の端を開いた上奏で、太中大夫の公孫卿、壺遂、太史令の司馬遷らが正朔(年初の正月と月初の朔日)を改めるよう上言した。

B この上言を御史大夫の兒寛に下し、博士とともに、正朔と服色を改めるよう協議を命じた詔。

C 右の下命にたいする御史大夫と博士の賜の答申で、受命改制説にしたがつて漢の暦を定めることを請うた覆奏。

D Cをうけて御史に發布された武帝の詔で、元封七年を太初元年に改めた。

E 公孫卿、壺遂、司馬遷らに詔し、侍郎の尊、大典星の射姓らとともに議して漢の暦をつくるように命じた。かくて、方位を定め、表(ノーマン)や漏刻を用いて、二十八宿を觀測し、晦朔・二至二分・日月の運行を定めた。

F 射姓らの上奏で、射姓らは暦計算の能力がないので、暦に詳しいものをあつめるように請うた。そこで、治暦の鄧平、長樂司馬の可、酒泉侯の宜君、侍郎の尊および民間の曆學者など二十餘人が選ばれ、方士の唐都、巴郡の落下閎が實際に觀測や計算をおこなった。

G 鄧平の八十一分法（太初曆の一月の長さは $29\frac{43}{81}$ 日で、この分母をとって八十一分法と呼ぶ）により漢曆を定めるとともに、もう一度、曆律の昏明（曆の基準となる日没と日出時の薄明の時間）を調べるように、司馬遷に命じた詔。

H 官宦の淳于陵渠の上奏で、再調査の結果、太初曆の精密さが再確認され、新しい曆が施行された。鄧平はこの功により太史丞になった。

この記事は、明確に前後ふたつに分かれる。前半のA～Dまでは、改曆にさきだち、元封七年を太初元年に改元するいきさつを記した記録、後半のE～Hまでは、實際に造曆のために觀測・計算をおこなった記録である。前半は、改曆をすすめる公孫卿らの上奏Aをうけて、武帝が批答Bにより御史大夫の兒寛と博士に漢の曆を造るように協議を命じ、ついでその批答Bに答えて改曆を請う覆奏C、それをうけて發布された改元の詔Dからなる。後半の制詔Eと上奏Fは、改曆のためのスタッフを集め、觀測や計算をおこなったもの。つづく制詔Gと上奏Hは、鄧平の八十一分法により太初曆を定めるとともに、再度、新曆の精度を調査したものである。實際に觀測技術や計算に精通していた人物が活躍したのは後半であるが、しかし前半はたんに改元をおこなっただけでなく、受命改制説を指導原理として改曆を意義づけたものであった。受命改制説にもとづいて曆、服色を改めるとともに改元をおこなうことは、ふつうに見られることである。

なお、Dの制詔が御史大夫に下されているのは、兒寛が經術に明るかったためでもあるが、漢簡にみたように當時の政治問題を處理するときの一般的手続きであったと考えられる。

また、Bの原文に「博士とともに議せよ」とあり、Eの原文に「議して漢の曆を造らしむ」とある「議」は、いわゆる集議のことである。集議は、法令を制定したり政策を決定したりするときの議事制度で、漢代の朝廷においてさかんにおこなわれたことが史書の記載から知られる<sup>⑩</sup>。曆法の發展にかんしても集議のはたした役割は少なからざるものがあり、後

半においてそれを検討するであろう。

つづいて、後漢の改暦はどうであろうか。前漢の太初暦は、その後、劉歆の増補をうけて三統暦となった。しかし、後漢のはじめになるとこの三統暦も天象との食い違いが明らかになり、元和二年になって四分改暦が現實化してゆく。そのいきさつは、

A 章帝は官暦の誤りを知り、史官に諮問したが、史官は暦が天象と合わないことは知っていても、改めることはできなかつた。

B そこで治暦の編訃・李梵らを召してその状態を總合的に調べさせた。

C 二月甲寅、四分暦の施行を告げる詔を發布した。<sup>(1)</sup>

この場合は太初改暦の場合と異なり、帝意が強く働いているようである。しかし、実際には章帝みずからが獨自の意志によつて改暦を斷行したわけではなく、後漢にはいった當初、建武八年（後三二）と永平九年（後六六）に改暦の進言がおこなわれ、永平年間には暦の修正もすでに二度おこなわれていた。群臣間では改暦の必要を當然のこととする状況ができあがっていたのである。皇帝みずからが自發的に改暦や論暦などに關與したケースは漢代ではこのときくらいで、後世でも皇帝が積極的に改暦などに乗り出すことは比較的少ない。

ここにあげた三回の改暦から、改暦もまた一般の諸政治問題とおなじように、基本的には臣下の上奏もしくは覆奏と、それに應ずる制詔もしくは批答により、段階的に實現されていることが知られよう。また、改暦はさきの太史の通常業務と異なり、發議が太史以外の太中大夫や皇帝などからおこなわれていること、さらにそれに加え、發議された内容がただちに皇帝の制可をうけて詔書とならずに、すくなくとも一度以上にわたり臣下に諮問されていることが相違点となっている。

それでは、通常業務をふくめ改暦の政治過程は、漢代の制詔一般が發布される過程にくらべてどんな特徴があるのだろうか。一般の制詔との相違点は、當時の政治機構のなかでどのような意味をもつものであるか。この疑問を解くためには、ひろく漢代の制詔について知る必要があるが、さいわいにも大庭氏がこの時代の制詔を丹念に集めその形態と内容の両面から新たな分類を試みられており、この考察を助けてくれる。氏によると、制詔はつぎの三つの形式に分類される<sup>(19)</sup>という。

第一形式は、皇帝の自發的な意志により一方的に出される命令である。内容的には官僚に政治の方針や心得をしめす場合とか、また特定の官僚に封爵、存問などの恩典をあたえたり、また一般庶民に赦とか民爵、復除といった恩典をほどこす場合に主として用いられるもので、この制詔の文例はきわめて多く見ることができるといふ。

第二形式は、官僚が委任されている権限内で自己の職務を遂行するために發意して獻策し、皇帝がそれを認可した結果、皇帝の命令として發布されるものである。原則として詔の最後に皇帝が認可したことをしめす「制して曰わく、可なり」という文辭をもつことを特徴としている。日常の政務處理の上からはこの形式がもっとも多かったはずであるが、それだけに史書にとどめられることはまれであった。

第三形式は、右の第一形式と第二形式を併用したもので、皇帝みずからの意志で命令を下すが、下命の對象は一部の特定官僚にかぎられ、それら特定官僚の答申を必要とする場合である。皇帝の下命が第一形式でなされ、答申が第二形式をとり、両者が合してひとつの詔を構成している。これを内容からいえば、ひとつには政策にかんする意見を官僚から徴するとき、二つには政策の大綱あるいは皇帝の意志の指向をしめし、その實現のために詳細な立法を官僚に委託するときである。

この三種の形式にもとづいて、太初暦と後漢四分暦の施行にいたった過程を通觀してみれば、改暦は皇帝の下命をうけ

て臣下が答申する第三形式に近い。相違點は、諮問と答申が幾度か繰り返されている點にあるが、これは改曆の實現にむかつて、下命の對象が高位の責任者からより下位の實務を實行するものへ、あるいはより觀測や曆計算の能力を有するものへと移っていったことを反映したものである。本稿の結論を先取りするようだが、改曆や曆の修正、新しい理論・計算術・儀器の導入などの天文學に直接かわる問題が取り扱われる場合には、壓倒的に第三形式が用いられたといつてまちがいない。すなわち改曆などにあたつては、皇帝はかならず群臣に下問し、官僚の意見を徴してから制詔を發布するのである。

では第一形式と第二形式はまったく用いられなかったのかというと、そんなことはない。官僚が委任されている権限内で發意する第二形式は、すでに見てきたように太史の通常業務としての形式である。日常の事務處理としてはこの形式がもっとも多かったはずであるが、それだけに先述の二例しか記録が見あたらない。いっぽう、第一形式となるとほとんど例がないといわざるをえない。しいていえば、王莽が新を建てる詔のなかで、鶏鳴（すなわち丑の時）を十二時の始まりとした記事をあげることができるかもしれぬ<sup>13</sup>。しかしこれはもともと建國のための詔であり、時刻制度の變更そのものを目的としたものではない。前後漢においてもこのような第一形式による曆の政治過程はみあたらず、皇帝がなら臣下に相談することもなしに一方的に曆を改めることはないようである。これは考えてみれば當然のことで、時制や改元などとはともかく、皇帝が専門知識を有する人の助言もなく、曆そのものや理論・計算術を改めることはまずありえないであろう。

となれば、曆にかんして第一形式はおおむね考慮する必要はなく、基本的には第二形式が通常業務の形式、第三形式が改曆などの形式といつてよさそうである。そして、兩形式のうちどちらが曆法の發達に大きな役割をはたしたのかとなれば、それはなんといつても第三形式であろう。事實、史書にも曆にかかわる第三形式を數多く見いだすことができ、漢代の天文學の成果である黃道座標の採用、黃道銅儀の製造、食理論の發展などがみなこの形式によつてゐる。そこで、今後

はこの種の記録を中心に検討すればよいであろう。

この検討にとりかかる前に、第三形式にもう一点付け加えておかねばならない重要な制度がある。それは曆にかかわる制詔が發布される場合、その發端が臣下などの上奏にはじまっていることである。太史のみならずあらゆる官僚や民間人から曆の發意・獻策がおこなわれているのである。曆の問題の發端はかなり似かよっており、そのほとんどは曆に關心を寄せた人々の上言が議論の端緒となっている。以上の點を考慮して、漢代において改曆・修正などがどのような経過をへて實現されたかという、つぎのように類型化していえよう。(1)臣下などが上奏制度をつうじて皇帝に進言し、(2)その問題について皇帝が詔によって特定の官僚に諮問し、(3)その諮問をうけた臣下が答申し、最後に、(4)皇帝がその答申に同意したことをしめす制可をあたえることによって、全體の過程が完結するのである。<sup>(1)</sup>ただしこの過程はあくまで類型化したものであり、やはり例外が存する。そのひとつはすでにみた後漢の改曆で、これには(1)の臣下の上奏がなく、形式上は章帝の諮問が直接の發端となっている。また、皇帝が日食や災異について諮問したり、術數の書や過去の觀測記録などの校訂・調査を臣下に命ずる場合も<sup>(2)</sup>(1)の上奏が缺けることが多く、同時に制可も缺くこととなる。このほか最初に進言された提案が群臣の協議の結果にもとづいて退けられたり、答申が天子の満足するものでなかったり問題が専門化したりして、そののちも諮問と答申が繰り返されてゆくこともある。こうしたいくつかの例外的ケースがあるものの、基本的にこの四段階の過程に準據して考えることが可能である。次節からは右の四段階からなる種々の事例を中心にとりあげつつ、この手續きのなかで曆法の發展に大きな影響があった(1)の發議の上奏と、(2)と(3)の臣下への諮問および答申に焦點をあわせて論ずることにしよう。

## 三 曆法と上奏

最初の發議の上奏は、問題提起をおもな機能としており、新しい理論や計算術、曆の政治的もしくは思想的位置づけ、さらには人材などを制度としての天文學のなかに導入する窓口・契機になっている。いいかえれば、天文學の新知見を公開の場に提出するための制度として機能するのである。

新知見を提出したもつともはやい事例は、甘露二年（前五二）におこなわれた大司農中丞の耿壽昌の上奏である。壽昌は觀測儀器の一種である圓儀を使用して、月行（月の日運動）が不規則であることを指摘した。<sup>(16)</sup>

また、改曆は實現しなかったが、太初改曆以外にも改曆を上言した例がある。

（文帝の十三年に）魯人の公孫臣が上書して、五德終始の順序をのべ、漢は土德の時代であり、そのしるしとして黃龍があらわれるだろうから、正朔を改め、衣服の色を易えるべきである、と言った。この件が張蒼に下されたが、蒼はこれを正しくないとして退けた。その後、黃龍が成紀に出現したので、文帝は公孫臣を召して博士とし、土德の時に應ずる曆法・制度を創立させ、（後）元年に改元した。<sup>(17)</sup>

このときは五德終始説および受命改制説に依據して改元がおこなわれた。これ以前に賈誼もまた上奏して、おなじ理由から曆・服色・制度をかえ、官名を定め、禮樂を興すように勤めている。<sup>(18)</sup> ちなみに、受命改制説にもとづいて改元や時制を改めたほかの事例に、初始元年（後八）、王莽が國號を新と定める詔のなかで、始建國元年に改元し、鶏鳴をもって時を定めるように命じたことがある。<sup>(19)</sup> 哀帝のときにもこの思想による待詔黃門の夏賀良らの建言を取り入れて、時刻法を改正している。建平二年六月に詔書を下して、同年を太初元將元年とし、陳聖劉太平皇帝と號し、漏刻を増して百二十刻とした。<sup>(20)</sup>

後漢の改曆はことごとく集議に諮られるようになるので、第四節で論じる。

後漢になると、注目すべき天文學史上の成果として、黃道座標が使用されるようになったことを指摘しなければならない。前漢時代には觀測はすべて赤道にかんしておこなわれるが、後漢中期になると黃道にそつて觀測がおこなわれるようになる。永元四年（後九二）、賈逵が上奏して、黃道によって觀測すれば、ただし日月の運行度數が得られるはずなので、太史官とともに調査させていただきたいと奏請した。この賈逵の上奏に制可があたえられ、黃道座標による觀測が實行に移され、のちには黃道銅儀も製造されるようになった。<sup>(21)</sup>黃道座標の使用は賈逵の上奏に端を發して制度化されたといえよう。

また、人材の登用がこの制度をきっかけにおこなわれた例としては、前漢では上述の魯人の公孫臣が改元を獻策して博士となり、鄧平は八十一分法を上った功で太史丞になつてゐる。<sup>(22)</sup>後漢では、もときわだった記事が二つある。永元二年（後九十）、蒙の公乗の宗紺が官曆の月食豫報の誤りをただしたので、太史令が宗紺が官の事業に有用であると上奏し、紺を待詔に除した。また熹平四年（後一七五）には、宗紺の孫の宗誠が上書して、やはり宗紺の計算法をうけついで月蝕の誤りをだした功により、誠を拜して舍人としたという。<sup>(23)</sup>前例の宗紺が就いた待詔は、太史令が遷任するように求めていることからみて、太史に屬する待詔にちがいない。<sup>(24)</sup>同様に宗誠の就いた舍人は靈臺丞の下に舍人があるから、文脈からみて天文臺員の舍人と見なして差し支えなからう。<sup>(25)</sup>いずれにせよ兩例とも月食の豫報に功があつたことにより官に取り立てられている。

右に類似した例は後世でも多い。北魏の李業興は造曆の功によって長子伯の爵位を賜り（『魏書』儒林傳）、隋の張胄玄は太史令劉暉との論争に勝つて員外散騎侍郎兼太史令になつてゐる（『隋書』藝術傳）。唐でも道士の傅仁均が戊寅曆を撰して員外散騎侍郎に擢せられ（『新唐書』律曆志一、『舊唐書』本傳）、李淳風はその傅仁均の曆議を駁して將仕郎を授かり



太史局に属したなど（『舊唐書』本傳）、かなり多くの事例を見ることが出来る。ここにのべたケースは天文學における人的擴大生産の一例であるが、同時に個人にとっては官職への任用や昇任が、しばしば暦を改め修正したり天文學を發展させたりしたことの褒賞になっている。

以上、暦にかんする發議の事例を前漢から後漢へ時代をおって見てきたが、それでは、これらの發議者の官職・身分と、かれらが提言した内容にどのような關連があるのだろうか。はたして、太史の提言のほうが一般官僚の提言よりつねに専門的、科學的であるといえるであろうか。まずは發議者の官職・身分を整理して、兩者のあいだにどのような關係があったか検討してみよう。

さきに言及した公孫臣は魯人と記されているだけで、このときはおそらく官位になかったと思われる。このほか前漢では大司農中丞（大司農・比二千石）、博士（太常・比六百石）、太中大夫（光祿勳・比千石）、太史令（太常・六百石、二例）、待詔黃門の名が見えていた。後漢では、天文學にかんしての上奏者の名は司馬彪『續漢書』律曆志中に集中している。それによれば、太僕（卿・中二千石）、太中大夫、左中郎將（以上光祿勳・比二千石）、中謁者（六百石<sup>(2)</sup>）、尙書侍郎（以上少府・尙書侍郎四百石）、五官郎中（光祿勳・比三百石）、相（沛國）、長史（常山國）、公乘（爵位第八級、二例）、太史令、太史待詔（または待詔太史、二例）、舍人、故治曆郎で、ほかに布衣かもしれないケースをふくめ官職の明記されていないものが四例ある。右の官のなかで曆法の専門官は、太史令、太史待詔といったところであろう。故治曆郎とあるのは現職ではなく、また舍人は文脈からみて太史に属した可能性がある。

これらの官職・身分についての分析から導かれることは、全體をつうじてさまざまな官のものが上奏しており、つねに特定の専門官が暦の知識を獨占的に上奏したとは認められないことである（ただし光祿勳と少府の屬官が多いことは注目しておいてよい）。たしかに専門官が新しい暦や修正案などをたびたび進言しており、問題の解決にあたっても目ざまし

い働きをしている。しかし、個々の上奏された内容を勘案してみると、太史官の提言のほうがつねに科學的であるということではなく、むしろ新たな進歩を促すような進言は、ときとして在野をふくむ天文臺の外部から導入されているのである。このことは、中國の曆法においては民間人や官僚全體のなかからひろく技術や理論を吸収する仕組みが制度化されていたことを物語っていて、中國天文學のありかたを考える場合に重要な示唆となる<sup>(27)</sup>。

つづいて、右の曆法にかかわる發議者のありかたを、そのほかの政治の諸問題における發議者と比較してみるとどうであらうか。たとえば封建、儲嗣、典禮、食貨、選舉、刑罰、邊事などくらべてみると、相違點としてはつぎのことを指摘できよう<sup>(28)</sup>。封建以下の政治問題の場合には、第一に、はじめから皇帝がみずからの意志で制詔を下している場合や、朝議において群臣に直接意見を問うなど、積極的に皇帝がかかわるケースが多々ある。第二に、前漢では丞相や御史、後漢では三公、およびときに九卿を加えた政治の最高責任者から問題が發議されることがかなりの多數にのぼっている。これにくらべ、曆についてはこのような形で皇帝や高級官僚の參與がまったくといいほど見られない（ただし王莽の場合は例外であろう）。こうしたちがいは、當然、曆法が各王朝の象徴して見なされていたといっても、それは封建をはじめとする國家の樞要な問題とは緊急性が異なっていたことをしめすものである。また、理念として曆は國家の象徴であったが、現實には皇帝やかから高級官僚が曆の計算・觀測といった専門的内容にまで踏み込んで關與することができず、在野をふくめひろく人材を必要としたことをしめすものでもあらう。

#### 四 曆法と諮問

諮問は、發端となる上奏をうけた天子が詔書によって當該問題を臣下に下し、諮問をうけた臣下は調査・檢討をしてそ

の結論を覆奏という形で答申する。この諮問の方法は、諮問の対象になった臣下によって、太史に下す場合と集議に諮る場合に大別できる。もちろんこのあいだにいくつかのバリエーションがあるが、基本的にはこの二つに分類することができる。

### (1) 太史への諮問

まず太史に下すケースについてみると、そのときの問題は解決に天文學の専門的知識、技術、經驗的な判斷を要する場合である。そして諮問に答える太史の態度はきわめて實證的で、かならず實際に觀測を實行し、あるいは過去の觀測記錄を調査したのちに結論を答申するのが特徴になっている。

前後漢の改曆にさいして、どちらの場合も太史への諮問があったことはすでに見たとおりである。ほかに前漢では適切な例を搜し出せないが、王莽のときの占星術にかんする諮問や、太史に命じて改元させた記事がある。<sup>(29)</sup>

わたしがもっとも典型的な太史への諮問と考えているのは、『續漢書』律曆志中に記された永元論曆である。これは永元十四年（後一〇二）におこなわれた漏刻法改正についての記錄で、諮問が「詔書して太常に下し、史官と融（霍融）とをして儀を以て天を校し、度の遠近を課」すように求めており、それをうけて「太常の史官、儀を運らし水を下し」、實際に儀器と漏刻によって太陽の運行を測定している。霍融の上奏文では、天象と漏刻の誤差を三刻とのべているのにたいし、太史が追試の結果は二刻半であったと報告しており、たしかに觀測が實行されたことを物語っている。なお、この記事は最初の發議から審査にいたるまで、太史の官が一貫して擔當しており、いわば専門官のみによって解決がはかられている。この點は、専門官以外の官僚の關與のもとにおこなわれる改曆と相違するところである。

過去の計算術や書物の調査、檢討を命じた例としては、成帝のときに詔を下して、太史令の尹咸に數術の書を校訂させ

た例や、後漢の熹平年間（後一七二—七八）にもとの治曆郎の宗整が上った九道術を、詔書して太史に下し舊術と比較検討させたなどがある<sup>(31)</sup>。

以上の諸例は、太史官が單獨に当該問題の解決にあたったと考えられるケースである。しかしこれ以外に、最初に太史に諮問しても、専門家のなかだけでは問題がすっかり解決しない場合があり、このようなときには特定の人物を召見・下問したり、さらに協議者の範圍をひろげて集議に諮問したりしており、かなり柔軟に對應したようである。

特定の人物を選んで再度諮問した例としては、靈帝のときに王漢が月蝕注を上ったところ、最初におこなわれた太史令の答申だけでは不十分だったので、尙書がふたたび穀城の門候の劉洪を召し、詔敕によってかれに下問した、というケースを指摘できる<sup>(32)</sup>。

太史への諮問とはかならずしも見なしたが、二度目の諮問の對象が擴大され、複数の官にまたがった例としてはつぎのケースがある。元鳳三年（前七八）、太史令の張壽王が上書して太初曆の誤りをただすよう奏請したので、一度目は主曆使者の鮮于妄人に詔して壽王を詰問させ、二度目の諮問は、詔して丞相・御史・大將軍・右將軍の史各一人とともに、上林の清臺（觀測臺）で雜候し、諸曆の精粗を調査させたという<sup>(33)</sup>。ここでは最初の下命が使者にむかってなされている。これはおそらくはじめに問題を提起したのが太史令であったために、鮮于妄人を曆を主る使者としてつかわしたものではなからうか。なお雜候の「雜」字は、雜議、雜治、雜作、雜舉などの用例があるように、所管を異にする二つ以上の官職が、共同で事にあたる場合に用いられる文字である<sup>(34)</sup>。

後漢では、太常府で再調査をおこなったことがある。光和三年（後一八〇）、太史令らが舍人の張恂の月食豫報術を用いるよう奏したところ、宗誠の兄の宗整から異議が唱えられたので、太史に下問があった。しかし、太史の職掌に屬することであるにもかかわらず、かれらはその問題を解決することができなかった。そこで太常に、「其れ注記（觀測記錄）を詳

らかに案じ、術の要を平議し、虚實を效驗せよ」と詔書を下し、ふたたび協議させた。このとき協議のために太常府に集められた参議者は、侍中の韓説、博士の蔡邕、穀城の門侯の劉洪、右郎中の陳調などで、太常の就耽が選んだ人々であった。<sup>(35)</sup>二度目に諮問をする臣下の選びかたはかならずしも決まった規定があったわけではなく、詔書をうけた者が、問題に應じて曆に詳しい者を指名したようである。

なお、さきの張壽王の件では上林の清臺での雜候の結果、壽王は漢曆を非り、天道に逆い、大不敬罪にあたとされ、處罰されようとした。後漢でも熹平論曆において、五官郎中の馮光と沛相上計掾の陳晃が新しい曆の施行を請い、百官の面前でかれらに反對する蔡邕と争い、その結果、三公は馮光と陳晃を不敬罪にあたるとし、鬼薪の刑（勞役刑）に課している（『續漢書』律曆志中）。むやみに改曆を唱えたり曆をみだりに誹謗することは禁じられており、度をすぎれば處罰されたのであった。このほか上述の光和三年の事例でも、太常府の協議により宗誠の術を用いるように制可があったにもかかわらず、張恂や宗整と宗誠がそれぞれ上書して協議結果に異を唱えたため、張恂と宗誠には二ヶ月分の奉祿によつて罪を贖わせ、宗整を二ヶ月にわたり左校の官に貶した。ただ、この事例は曆を誹謗したためというよりは、太常府の協議にしたがわなかったための處置かもしれない。また純粹に曆にかかわる改正とはいえないが、哀帝のときに改元し時制を改めた夏賀良らも、道に反き衆を惑わしたものとされ、不道の罪で伏誅されている。

以上、右のべてきたところは太史へ下された諮問を中心とした實際例である。ところで、集議のなかに有司の議とよばれる議があり、これがいままでにのべてきた太史への諮問と性格をともしていると思われる。有司の議は永田英正氏の定義によると、議事内容が一般の國政や國策を論ずるものからすればかなり特殊なもので、専門的な知識とか經驗あるいは技術などを必要とする問題に對處するために、それにもっとも適した専門家や關係者を召集して開かれるという。<sup>(36)</sup>氏が有司の議の實例として解説されているのは、前漢において、穀物不足を補うために入穀贖罪を許可するかどうかの件、

貨幣を改める件、發見された寶鼎の取扱にかんする件、匈奴單于の首を見せしめのために街にさらすかどうか、といったことである。これらの事例に照らしあわせて、さきの専門家や當該問題の關係者によつて構成される議という規準よりすれば、いままでに論じた太史への諮問のうち、太初改曆の御史大夫と博士の議、光和三年に太常府で開かれた議などは、有司の議であつたと考えられる。これとはべつに永元論曆の漏刻法改正に代表されるような太史への諮問は、觀測・計算・調査を實行しており協議をしたものではないので集議と見なすことはできないが、諮問の性格としては有司の議と共通していよう。

## (2) 集議への諮問

三公・九卿ら高級官僚が、公的な場で曆法の知識を得るとともに、曆にたいする自己の見解を百官にむけてもつとも效果的に發言したのは、ここに取り上げる集議においてである。集議は、公的に自己の意見を表明する機會であつただけに、曆と官僚のかかわりをさぐるとき見逃せない制度となつてゐる。

集議についてはすでに專論がある。<sup>(37)</sup>以下その諸成果によりつつ、曆法とのかかわりに焦點をあてて論ずることにしよう。集議とはいわゆる會議のことで、衆議またはたんに議とも表現され、漢代の議事制度であるとともに皇帝の諮問機關としての役割をもはたしていた。集議にはかられた議事としては、たとえば『西漢會要』(卷四十・四十二)が、立君、儲嗣、宗廟、郊祀、典禮、封建、功賞、民政、法制、同姓、大臣、邊事、雜錄に分類しており、國家のおもだった問題は公の場で討議されてゐたことがわかる。

集議にはいくつかの種類があり、まず第一に、皇帝が臨席する朝議と、そうでない場合の廷議とに分けられる。朝議は皇帝みずから臨席して群臣の意見を直接に聴取することをおもな目的としており、臨時に開催されることもあつたが、ふ

つうは毎月の朔日や歳首、および五日に一度開かれた。

史書には曆法にかかわる議論が、朝議にはかられたケースは認められない。したがって曆にかんして注目すべきは廷議であるが、この廷議はさらに出席者の官職や議事の内容から、公卿の議、中朝官の議、大議、それに前節でみた有司の議などに分類される。

種々の集議のなかで、曆に關係してもっとも注目すべきは、曆そのものを改めようとするさいに開かれた廷議である。というのは、こと改曆にかんしてはかならずといていいほどこの種の廷議が開かれており、その議において改曆の妥當性や曆の政治的・思想的なありかたが論じられているからである。あきらかに太史に下される専門的内容の諮問とは區別されていたのである。

前漢では、受命改制説によって改曆をおこなうように進言した御史大夫の兒寛と博士の賜の議がその代表で、これはどちらかといえば有司の議であろう。ついで、後漢になるとこの種の廷議に變化があらわれてくる。それは改曆のための廷議に、從來の出席者よりも地位の高い公卿が参加するようになり、かつ出席者の数もずっと膨らんだのである。前漢では改曆の諮問は、張蒼や劉歆の特定の個人や、御史大夫と博士のかぎられた人々の議であった。後漢における改曆の廷議は、永平九年（後六六）、延光二年（後一二三）、漢安二年（後一四三）、熹平四年（後一七五）の四回、後漢全體にわたって開かれていた。各廷議の下命の對象を順にのべると、「三公・太常に下し曆を知る者に雜議せしむ」、「公卿に下し詳議せしむ」、「三公・百官に下し雜議せしむ」、「三府に下し儒林の明道なる者と詳議せしむ」とあり、公卿が筆頭の主議者となっており、どちらかといえば公卿の議や大議に近い。一概には言えないが、このような前漢と後漢の違いは、後漢になるにしたがって、曆がよりひろく一般官僚から關心をもたれるようになったことを反映したものではなからうか。

つぎに、廷議の代表的なものとして延光二年の議を引き、實際の記録を見てみよう。

A 安帝の延光二年、中謁者の竇誦が甲寅元を用いるべきであると言ひ、河南の梁豊はふたたび太初曆を用いるべきであると言つた。尙書郎の張衡と周興はいずれも曆に詳しく、竇誦や梁豊を問いたしたが、かれらは答えられなかつたり、誤つたことを言つたりした。張衡と周興は「儀注」に照らし合わせ、過去を考え現在を調べて、九道法がもつとも精密であるとした。

B 詔書して（當該問題を）公卿に下し、詳しく議論させた。

C 太尉の劉愷らが上るに、侍中の施延らの意見は、「……甲寅元は天と對應しており、圖讖とも一致しており、施行すべきです」である。

D 博士の黃廣、大行令の任僉は、九道法による、という意見である。

E 河南尹の祉、太子舍人の李泓ら四十人の意見は、「……元和に曆を變えたのは、『保乾圖』の「三百歳にして、斗曆憲を改む」という文に應じたものです。四分曆はもともと圖讖より起り、もつとも正確であり、代えるべきではありません」である。

F 劉愷ら八十四人は、太初曆にしたがうべきである、という意見である。

G 尙書令の陳忠が上奏して、「……冬至の太陽の位置は斗宿にあたるにもかかわらず、（太初曆は）牽牛にあると言つており、迂闊にもふたたび太初曆を用いることができないのは、以上のごとくはつきりしています。（これらのことは）史官のみな知るところであつて、張衡、周興だけが知っているわけではありません。はじめは九道法が精密であると考えましたが、いまでは議論する人々は九道法に缺陷があると考えており、また甲寅元にも誤りが多く、どちらも標準とするわけにはゆきません……」。

H 皇帝はこの意見を入れて、ついに改曆をやめた。<sup>(38)</sup>



Aは、事の發端をのべている。この廷議は、後漢四分曆が施行されてからはじめて開かれた議であるにもかかわらず、すでに甲寅元、九道法、太初曆の三つもの曆法が提唱されている。

Bは、公卿に廷議を開かせて、四分曆と他の三曆法の優劣を判斷するように命じたものである。本來の有資格者だけならなる公卿の議の出席者数は、前漢の場合であるが、三十から五十人といわれる。この延光の廷議は「公卿に下し」たと記されているものの、實際の出席者は百二十人をこえていて、中外朝の官僚が一同に會しておこなわれる大議ではなかったかと思われる。ほかの廷議の場合でも、曆に精通したものが招かれるのがふつうであつたらしく、いずれも純粹の公卿の議ではなかった。

CからFは、このときの廷議で發言された意見である。集議で決定された最終結論は、前漢では丞相にそれを上奏する責任があり、後漢では三公（太尉・司徒・司空）にその義務があつた。また、その結果は參加者の全部もしくは一部の名をあげて文書で報告したが、もし意見が分かれた場合には、それらの意見も主唱者と贊成者をあげて全部を奏上することになつて<sup>(39)</sup>いた。したがって、Cは侍中の施延らが甲寅元を、Dは博士の黃廣と大行令の任僉が九道法を、Eは河南尹の社と太子舍人の李泓ら四十人が後漢四分曆の繼續を、Fは劉愷ら八十四人が太初曆を施行するように訴えた意見であつた。<sup>(40)</sup>すでに後漢四分曆が施行されていたにもかかわらず、もっとも支持者が多かつたのはFの太初曆らしく、Gの陳忠のことばを借りれば、武帝が「夷を攘<sup>はら</sup>い境を廓<sup>ひろ</sup>め、國を享けること久長」とした國運盛んな時代の曆法に人氣が集まつていた。

Gの尙書令の陳忠の上奏文は、廷議の結論とはべつに上つた意見と考えられる。臣下には集議で協議された結論になんとしても納得がいかないときには、それとはべつに直接天子に上奏することができた。陳忠の上言はこれに相當しており、甲寅元、九道法、太初曆のそれぞれの缺點をのべ、後漢四分曆の繼續を訴えている。

Hでは、結局、安帝は陳忠の意見にしたがつて改曆をやめている。

漢代における集議の結論は、本來、皇帝が意志決定するときの参考意見にすぎず、集議での最多数の意見がかならず採用されたわけではなく、逆に少數の意見でも帝の意にかなえば制可があたえられたのである。また、陳忠のような上奏は蔡邕『獨斷』にいうところの駁議と考えられ、その例は前後漢を通じて數多く見ることができる。<sup>(4)</sup>

以上にのべたところは、廷議において改暦の議論がまとめられて皇帝に裁可されるまでの経過であるが、それでは、より具體的に集議がどのように運営されたかを知る史料はないだろうか。参加者をふくむ具體的な運営方法がわかれば、暦と官僚の關係もよりはっきりするであろう。この問いに不十分ながらも答えてくれるのが、熹平論暦の劉昭注引く『蔡邕集』である。ここから後漢の參議者の官職や席次など實際の集議の進めかたの一端をうかがうことができるので、節をあらため、この『蔡邕集』を検討してみよう。

### (3) 廷議の參議者

當該の『蔡邕集』はつぎのとおり。

三月九日、百官が府に會合した。公が殿下において東面し、校尉は南面し、侍中・郎將・大夫・千石・六百石は二列にならんで北面し、議郎・博士は西面した。戸曹令史が座の中央で詔書を読み上げ、公が意見をのべた。蔡邕は前に進み出て、侍中の西北、公卿の近くに席をしめ、馮光、陳晃とたがいに事の是非を問いた<sup>(4)</sup>だした。

この廷議の開かれた會場は、『續漢書』の本文から司徒府で開催されたことがわかる。これは、未央宮もしくは丞相府中の朝會の殿（すなわち司徒府）が廷議の主たる議場であったという前漢の慣例を受け継いだものである。後漢の議場としては『後漢書』には朝堂と記されることが一番多く、そのほかには南宮にあったという崇德前殿などの名がわずかに記されている。

參議者の資格については、三公・九卿をはじめ校尉、侍中、郎將、大夫、千石、六百石、議郎、博士が名を連ねており、おおむね六百石以上が主體となつてゐると考えられる。<sup>(43)</sup>

廷議の開始にさいして詔書を読み上げる戸曹令史は、尙書の下戸曹であろう。<sup>(44)</sup>

文中の南面した校尉は、司隸校尉のことである。本來、司隸校尉は前漢のときは武官であつたが、後漢になつてその職掌が大きく變化して刺史としての性格を増すようになり、中央にあつては百官以下の諸官を察舉し、京師附近の督察にあつた。<sup>(45)</sup>

つぎに侍中、郎將、大夫、議郎、博士であるが、侍中は少府に、議郎は光祿勳に、博士は太常に屬した。郎將および大夫は官を特定しにくいが、光祿勳の屬官を指していることはまちがいあるまい。<sup>(46)</sup> このなかで、侍中、大夫、議郎、博士の四つの官職は、所屬する上官や設置のいきさつは異なるものの、いわば天子側近の顧問官の役割をはたしていたという點で性格が共通している。いずれも種々の政治的配慮や古今に通じた學識にもとづく助言をもつて參加したものであろう。

側近と曆のかかわりについては、たんなる參議者の性格をこえ、さらに注意すべき意味があるようだ。一般に中國の官僚制においては、天子に近接した官がもっとも力を振るうといわれている。漢代の九卿のなかでは、もっとも皇帝に近接した官廳が光祿勳と少府の兩卿であつた。光祿勳はもともと皇帝の身邊を警備することと、公的な面での皇帝の生活に奉仕する郎官を統率しており、少府は私的な面で皇帝の生活に奉仕していた。<sup>(47)</sup> 上奏者の官について検討したところでもやはり光祿勳と少府が目だつてゐたことを考えあわせると、曆の問題においても、天子にもっとも近いところで天子の相談にあつた光祿勳と少府の二官廳の屬官が、重要な役割をはたしてゐたと考えられる。

この傾向は、さらに具體的に人物をあげて検討することが可能である。たとえば、前漢では公孫臣が上奏のち博士に取り立てられ、賈誼も當時博士もしくは太中大夫であつた。太初改曆においても太中大夫、博士、侍郎の名が見えている。

し、落下闕は改暦のち侍中を拜した。<sup>(48)</sup>後漢になると、前漢では見られなかったような、今日でも通用する科學的議論が繰りひろげられるようになる。<sup>(49)</sup>とくに賈逵論暦の賈逵の意見はするどい。このときの賈逵は左中郎將の官にあり、比二千石で光祿勳に屬した。<sup>(50)</sup>延光論暦における尙書郎（少府）の張衡は、のちに太史令に轉出して、候風地動儀を製作するとともに、『靈憲』『渾儀注』『渾儀圖注』などを著して、漢代を代表する天文學者である。<sup>(51)</sup>改暦を議した熹平論暦において、馮光と陳晃の上言をしりぞけた蔡邕は、天子に顧問應對した議郎（光祿勳）であり、劉昭が「蔡邕の議を觀るに、以て天機を言う可し」というように、當時においては見識の高いものであった。<sup>(52)</sup>そのほか暦算を善くしたという何休もはじめ議郎を拜し、のちに諫議大夫（光祿勳）になっている。<sup>(53)</sup>おそらく、かれらが天文學に造詣がふかった理由のひとつは、董仲舒以來の天人相關説にもとづくもので、天のしめす意を理解しようとする動機が、わたしたちの想像以上に科學的・實證的な態度を生み出し、暦法を理解させたのであろう。そうしたことが、天子の身近にこれらの人々を顧問・應對させることになったのではなからうか。<sup>(54)</sup>影響力の強い意見は、総合的な學問を身につけた知識人として天子の側近に仕えていた人々から提出されており、國立天文臺が設置されていたからといって、必ずしも太史官が知識を獨占したのではなかった。

以上を振り返って、參議者について總括すると、三公が主催者として議論を統率し、司隸校尉は諸官督察の職務にもとづいて南面し、公卿、二千石、千石、六百石などは實際の政治における責任者として加わって、爲政者の現實的立場から問題を論じた。なかでも侍中、大夫、議郎、博士は天子の側近に仕えるものとして、古今につうずる學識者の理想論的な立場から、あるいはときに豊富な天文學や災異の知識をもって意見を表明したのであろう。これら參議者のほかに、議事が暦法にかかわるテーマであったために太史令とその屬官が召集されており、かれらは専門的知識・技術・經驗にもとづいて天文學的立場から意見をのべた。新たに暦法や計算術・理論などが提唱されると、爲政者の政治的立場、傳統的な學問的視點、中國天文學の専門的立場の三つの立場から評價されたといえよう。

## むすびにかえて

中國の曆法の形成は、多くの場合、たんにひとりの優れた才能によって實現されたのではなく、あたかも曆の撰者を取りまくかのように、在野の人間、下級官吏、天文官、天子の側近などがつねに關與してきた。その結果、皇帝をはじめ官僚達のさまざまな思想、意圖、價值觀が曆の形成に反映してきたと考えられ、冒頭でのべたような思想性を備えた曆法も登場してくる。のみならず、逆に、かれら官僚の價值觀にそつた曆理論すら見られるのである。

新たな曆理論が傳統の力にひきよせられ、中國獨自の形式をしめした典型は、定朔とその便宜的方法である新朔の法に見ることができる。定朔は、日月の不等速運動を考慮して、毎月の朔を決定する方法で、日月が眞に合となる日を朔とする。これにたいし、日月の平均位置によって朔を求める方法を平朔という。定朔が平朔よりすぐれているのはもちろんで、定朔を採用すれば月相と曆日はよく一致し、蝕はかならず朔日に起こるようになる。しかし定朔を採用すると、傳統的な曆ではこまったことがひとつある。それまでの曆は、小月と大月を交互に置き、ときに大月を二個連續させているが、定朔によって朔を決定すると、いわゆる三大二小（大月が三回續き、小月が二回續く）もしくは四大三小（大月が四回續き、小月が三回續く）が起きてしまう。この傳統的な曆との相違が、一般の官僚や曆學者の不評を買い、かれらは『春秋』に晦や二日に蝕が起きていることを根據として、月の盈虧と曆日は一致する必要はないと主張してきた。劉宋の何承天がはじめて定朔を唱えて以來、隋の劉焯、唐の傅仁均と定朔使用のころみがあり、一時は定朔を用いた傅仁均の曆が施行されたこともあったが、そのいっぽうで傳統に執着する官僚や曆學者は約二百年にわたり定朔の採用をこばみつづけてきた。そこで提唱されたのが、唐の李淳風による進朔の法で、朔日を適當に一日すすめる便宜的方法により、四大三小を回避す

るようにし、この方法は以後の唐宋の曆法にも踏襲されてゆく。唐初において、四大三小のような議論は、最終的には孔穎達と尙書八座の參議おいて協議されており、政治的決着を要する問題であった。李淳風の進朔の法は、儒教の經典を尊ぶ價值觀に引きずられた採擇であり、一般の官僚や曆學者に受け入れられるよう新しい理論に手を加え、曆の傳統的形式を守ろうとしたものであった。<sup>55</sup>

このほか上元・積年、沒日、五行にもとづく土用、天文常數の律・度量衡・象數易への附會などについても、この視點からある程度理解できるのではないかと思う。とくに、後漢における改曆の議論は、上元、すなわち曆計算の起點(epoch)に緯書を附會することが議論の大きな焦點になっている。注意すべきは、この議論はもっぱら廷議である延光、漢安、熹平の論曆で展開されており、曆と緯書の問題は、集議において公卿が審議するに足る議題と見なされていたことを物語っている。と同時に、このことはこの種の問題が天子や公卿らの關心のもとに形成されてきたことを示唆するものである。誤解がないように断わっておくが、官僚が直接に緯書と曆を附會させた張本人だというのはない。後漢の曆と緯書の附會については今後も研究の必要があるが、<sup>56</sup>すくなくとも公卿らが曆を評價し受容する立場にあり、しかもかれらが意見をのべる機會が制度的に保證されていたことが、この時期の曆のありかたをある程度まで方向づけたにちがいない、とわたしはみているのである。なぜ後漢時代をつうじてこれほどまでに曆と緯書の附會が流行したのか、その疑問を解くためには、曆の創造者、撰者にのみ焦點をあてて考えるのではなく、曆の受容者や利用者の視點を導入してみる必要があるのではなからうか。

しかしながら、右にのべたような今日から見れば外的要請による曆法の變形と見なされる特徴は、曆の計算を不可能にするようなものではなく、曆自體に本質的な影響をもたらしはしない。いわば、すべて曆の周邊部への介入といつてよからう。進朔の法は、曆日を決めるための便宜的方法にすぎない。また、ふつう中國では上元を何萬年ときには何十萬年と

いった、はるか上古に設定することがおこなわれるが、これとて計算の手間が増えるにすぎず、土用と没日はむしろ曆注にかかわるものである。中國では天の意をただしく知るためにつねに正確な曆が求められてきたから、曆計算のある側面が文化的に變化もしくは強調されたとしても、その影響はここにしめすように曆の周邊部にとどまったのではなからうか。最後に、曆法と制度について、とくに上述してきた政治過程と一般的な科學活動の問題についてのべよう。

一般に、科學知識が社會にインパクトをあたえ、後世に受け継がれてゆくためには、個人の心中に生じた發見なり發明が、他者にむけて、すなわち社會にむけて公表されることが必要である。社會的に公表された知識は、特定の個人なり集團から、その時代の既成の學問や價值觀・思考様式にもとづいて評價され、あるものは新知見として歡迎され、あるものは忘れられてゆく。受け入れられ、社會的に共有された知は、論議や書物・教育などをつうじて同時代の人々に、さらには後世に傳達されてゆく。この公開から、評價をへて、傳達にいたる三つの過程は、いかなる社會の科學的活動にも見いだすことができるものであり、同時に、この營みのありかたに、その社會特有の科學活動がしめされているといえよう。現代を例にとろう。きわめて一般化していえば、今日の研究者はおなじ分野の研究者にむけて自説を公表し、その説を評價をする者も、研究成果を利用する者もおなじ研究者である。原則として、最初に研究テーマを設定して以來、この過程に學問以外の評價・價值がはいりこむ餘地はない。これが、いわゆる學問の自立性といわれるもので、今日の知識のありかたを特徴づけていると考えられている。

中國天文學の場合、どうか。じつは、わたしは上奏、諮問、覆奏、制可と展開するこの政治過程に、そのまま科學の社會的營みが展開しているのを見てとるのである。上奏は天文知識の社會的公開に、諮問と覆奏は社會的評價に相當する。個人的なコミュニケーションの機會は、この制度のそこにある。政治や組織上の制約、時代の學問觀などによって傳達される範圍は限定されるものの、制詔として知識が、天文臺をはじめとする關係官廳や人民に伝えられてゆく。そして、

天文學の社會的な形成過程が、そのまま行政上の手續きとかさなっていることに、國家科學としての中國天文學の特徴をはっきりと見いだすことができよう。制度上、上奏による公表が天子にむけてなされること、審議者が曆の専門家だけでなくしばしば公卿などの一般官僚から構成されることに、とりもなおさず中國天文學の公的性格がぎざまれているのである。

こうした政治過程と科學知識の形成過程の一體化が意味するところはなんであろうか。それは、政治が天文學を治世の手段として用いる仕組みであり、天文學の自立性が限られていたことをしめすものであろう。しかし、だからといって、天文學の發展が一方的に制約されたというのではない。逆に、天文學の側からいえば、この政治過程が新しい知見の導入を永續化するための制度的保證となっていたことを見逃してはならない。この知の制度化こそ、天文學が二千年にわたり停滯することなく發展するという、驚くべき持續性の要因となっているのである。後世にわたり、上奏や諮問をつうじ、創造的な進言や人材の登用を、太史官の内部・民間・一般官僚からはひろく吸収する方法が制度化されていたことは、科學活動の新陳代謝をうながし、活性化をはかり、安定的な發展を可能にした重要な要因のひとつに數えるべきであろう。もちろん、天文學の自由な發展を望む場合、マイナス面はやはり存在する。この政治的價值が優越する制度のもとでは、天文學の大規模で質的な變換をともなつた發展は起こりにくかつたにちがいない。あらたな發明・發見が、曆の専門知識をもたない人々に無理なく受け入れられていくためには、より多くの時間を必要とするであらう。また、本來、制度というものは、既成の傳統を保存する方向に働く。したがってその結果として、ゆるやかな質的に安定した發展がもたらされたのであろう。前近代の科學から近代に接續するような大轉換が起るためには、中國天文學が依據した制度的枠組みそのものが轉換されなければならなかつたのである。



## 注

- (1) 『續漢書』志第二・律曆志中。  
天文臺については、戴內清「官僚政治と中國中世の科學」(『科學史研究』第五十九號、一九六一)、同氏「中世科學技術史の展望」(『中國中世科學技術史の研究』所收、角川書店、一九六三)、Goh Thean Chye, The History of the Chinese Astronomical Bureau, University of Malaya, 1967, 松島才次郎「太史局と司天臺」(『信州大學教育學部紀要』二十五、一九七二)、薄樹人「清欽天監人事年表」(『科技史文集』第一輯、上海科學技術出版社、一九七八)、山田慶兒「授時曆の道」(みすず書房、一九八〇)、朱榜「徐家匯天文臺資料」(『中國天文學史文集』第四集、科學出版社、一九八六)を参照。
- (2) いわゆる干支令については、中田薫『法制史論集』第四卷(岩波書店、一九八一)「支那律令法系の發達について」補考、一八七頁—一九二頁、大庭脩『秦漢法制史の研究』(創文社、一九八二)十頁および二二五頁。
- (3) 『續漢書』志第二・律曆志中・永元論曆「其年十一月甲寅。詔曰……今下晷景漏刻四十八箭立成并官府常用者。計吏到。班予四十八箭。」『史記』卷六十・三王世家「太僕臣賀行御史大夫事。昧死言。太常臣充言。卜。入四月二十八日乙巳。可立諸侯王。臣昧死奏輿地圖。請所立國名。禮儀別奏。臣昧死請。」
- (4) 『續漢書』志第二十五・百官志一・太常・太史令「掌天時星曆。凡歲將終。奏新年曆。凡國祭祀喪娶之事。掌奏良日及時節禁忌。凡國有瑞應災異。掌記之。」
- (5) 大庭前掲書、二三五頁以下「居延出土の詔書冊」、同氏『木簡』(學生社、一九八二)一三三頁—一四五頁。
- (6) 御史大夫吉昧死言。丞相相上大常昌書言。大史丞定言。元康五年五月二日壬子日夏至。宜寢兵。大官抒井。更水火。進鳴雞。謁以聞。布常用者。●臣謹案比原宗御者。水衡抒大官御井。中二々石々令官各抒。別火(二〇・二七、甲九二)官先夏至一日。以除際取火。授中二々石々官在長安雲陽者。其民皆受。以日至易故火。庚戌寢兵。不聽事盡甲寅五日。臣請布。臣昧死以聞。(五・一〇、甲九二)制曰可。(三三・二六、甲一七二)別火官は大鴻臚の屬官で、改火、すなわち季節ごとに火取りの木である燧(漢簡は燧につくる)を取りかえることを掌る(『漢書』百官公卿表・典客)。「進鳴雞」は、大庭氏は「鳴雞時に進める(行事を行う)」と解釋されたが『木簡學入門』講談社、一九八四、二九〇頁)、ふつう時刻の「鳴雞」を「鳴雞」とはいわないのでこの解釋には疑問が残る。(一)内は居延漢簡の原簡番號と、中央科學院考古研究所編『居延漢簡甲編』(科學出版社、一九五九、北京)の番號である。
- (7) 御史大夫については、大庭前掲書、四十三頁以下「御史大夫と通常業務」および二五六頁参照。
- (8) 集議については、永田英正「漢代の集議について」(『東方學報』京都・第四十三冊、一九七二)、そのほかの參考論文は同氏論文の注(一)に列舉されている。なお集議という言葉の使用について、永田氏にしたがってたんに會議の意味で使っていることを斷わっておく。
- (9) 『續漢書』志第二・律曆志中。
- (10) 大庭前掲書、二〇一頁以下「漢代制詔の形態」を参照。
- (11) 『漢書』卷九十九上・王莽傳上および『資治通鑑』卷三十六。漢代では一日を百刻に分割する方法とともに、十二分割して十二支で時刻を表記する方法が併用された。胡注によると、王莽はこの十二時制の始まりを鶏鳴、すなわち丑の時から數え始めるようにしたという。
- (12) なおこの類型は大筋において、一般の政治問題が解決される過程とまったく同一といってさしつかえない。たとえば、漢代の制詔が發布される過程の典型と考えられるのは、『史記』三王世家である。これは武帝の三人の子をそれぞれ齊王、燕王、廣陵王に封ずるいきさつを記している。三王世家は封建という國家のもっとも樞要な問題であるた

めに、丞相、御史、太常、大行令、太子少傅、宗正など政治の重要な地位にいる高級官僚によって進められており、改暦の場合と審議に参加する官にちがいが認められる。しかし制詔が出されるまでの形式はほぼ同一であり、當時の中國の人々にとって、改暦をはじめとする暦の諸問題が、ふつうの政治問題として意識されていたことが知られる。三王世家の解釋については大庭前掲書、二八五頁以下「史記三王世家と漢の公文書」を参照。

(15) 『漢書』卷九十九下・王莽傳下および『漢書』卷三十・藝文志。本稿の四・(1)太史への諮問を参照。

(16) 『續漢書』志第二・律曆志下・賈逵論曆。

(17) 『漢書』卷四十二・任敖傳「魯人公孫臣上書。陳終始五德傳。言漢土德時。其符黃龍見。當改正朔。易服色。事下蒼。蒼以爲非是。罷之。其後黃龍見成紀。於是文帝召公孫臣以爲博士。草立土德時曆制度。更元年。」

(18) 『漢書』卷四十八・賈誼傳。

(19) 注(13)参照。

(20) 『漢書』卷十一・哀帝紀、卷二十六・天文志、卷七十五・李尋傳。なおこの百二十刻漏刻法はまもなく廢止されたが、王莽が居攝三年(後八)に復活させた(王莽傳上)。ふつう漢代の漏刻は百刻である。

(21) 『續漢書』志第二・律曆志中・賈逵論曆。同様に、黃道座標の使用にともなって、黃道に近い軌道上を動く月の運行にかんする理論もいじりしく進歩し、その結果、後漢の中頃から月蝕にかんするいくつかの提言がおこなわれている。たとえば熹平年間(後一七二—一七八)にもの治曆郎の宗整が上った「九道術」、永元二年(後九十)の宗紺と熹平四年(後一七五)の宗誠による月蝕豫報術の改正、光和二年(後一七九)の滿年公乘の王漢の「月蝕注」など。

(22) 漢代におこなわれた官吏の登用法は、漢初では任子、良家子、富貴、獻策などがあり、武帝以後からは博士弟子員の科、孝廉、賢良方正、

茂才(秀才)、明經、有道、直言、敦朴などの選舉、および徵召・辟召があった。このなかで、獻策は、みずから上書しその結果によって官に任じられるもので、他人の推薦をまつて登用される選舉とは異なる。文帝のときの公孫臣が博士になったのは、この獻策によったものであり、後漢の二例もこれにふくめることができると思う。

(23) ともに『續漢書』志第二・律曆志中・論月蝕。

(24) 『續漢書』志第二十五・百官志一・太常・太史令・注引『漢官』に、太史待詔と靈臺待詔がある。もともと待詔とは天子の詔を待つことをいい、特別な才能・技藝をもって召し出され、その後正式に官に命じる詔が發布されるのを待っている状態、もしくはそのような身分をいう。この例で有名なのが東方朔で、武帝が金馬門で待詔させたという。前漢でも落下閎が同縣人の譙隆の薦により待詔太史になっており、『文選』公孫弘傳贊注引『益部耆舊傳』、待詔は天文官を任用するための主要な方法のひとつであつたらしい。ただし『漢官』の太史待詔、靈臺待詔は官職と考えられ、前漢の「詔を待つ」状態がやがて官として定着したのではないかと想像される。詳しくは、杉本憲司「漢代の待詔について」(『大阪府立大學社會科學論集』四一五、一九七三)、安作璋・熊鐵基『秦漢官制史稿』(齊魯書社、一九八五)下冊・三七一頁以下「待詔」を参照。

(25) 『續漢書』志第二十五・百官志一・太常・太史令・注引『漢官』。

(26) 『漢書』卷十九上・百官公卿表・少府「成帝建初四年、更名中書謁者令爲中謁者令」、『續漢書』志第三十・輿服下・注引『東觀漢記』「建武元年……尙書、中謁者、謁者……秩皆六百石、……議郎、中謁者秩皆比六百石。」とあり、中謁者は少府の屬と思われる。中謁者の官秩は一應六百石としたが、右の『東觀漢記』には比六百石とありどちらがただししか判然としない。

(27) こころみに歴代の施行された暦について、撰者の身分・官職を一覧してみると、天文官の手になる暦と、非天文官の手になる暦の数はほぼ

同數に近い。とくに天文官でない撰者の暦は南北朝時代に集中している。

(28)

これにたいし、暦法にかかわる政治過程と共通性が認められる議事は、太史の職掌の一部でもあった律の場合であろう。補官の例としては、待詔候鐘律の殷彤が、嚴宣を召して學官に補すよう上言したところ、詔をうけて太史丞が嚴宣を試験している。諮問のケースとしては、元帝のとき、帝が太子太傅の玄成と諫議大夫の章をして、樂府で京房に質問し、その結果、劉歆の法にかえて、京房の六十律が史官で施行された(ともに『續漢書』律曆志上)。また太常樂丞の鮑業らが上った樂事が、車騎將軍の馬防に下され、さらに馬防の上言が三公に下された例などがある(『續漢書』律曆志上・注引『薛瑩書』)。

(29)

『漢書』卷九十九下・王莽傳下「有星孛于張。東南行五日不見。莽數召問太史令宗宣・諸術數家。皆繆對言。天文安善。群賊且滅。」、「莽見盜賊多。乃令太史推三萬六千歲曆紀。六歲一改元。布天下。」

(30)

『漢書』卷三十・藝文志。

(31)

『續漢書』志第二・律曆志中。もともと太史には過去の暦法や觀測記錄集などが藏されていたらしい。太史が所藏した計算や觀測などの資料集・記錄集と考えられるものとして、行事史官注、行事候注、日月宿簿、太史官候注、史官候注、官注、儀注、奏記譜注、注記、官案注、漢所作注、漢成注などの名が見えている。

(32)

『續漢書』志第二・律曆志中・論月蝕。このほか後漢四分曆の編者の編訛・李梵が曆の施行にあたって傳統的な曆とは異なる方法を実施して物議をかましたので、章帝が左中郎將の賈逵に命じて、治曆者の衛承、李崇、大尉の屬の梁鮪、司徒の掾の嚴島、太子舍人の除震、鉅鹿の公乘の蘇統および編訛、李梵ら十人に質問させたというケースもある(『續漢書』律曆志中)。ここでは賈逵を責任者として官職や専門をこえて曆に詳しいと思われる人を選んで質問させている。また、本来の職掌をこえて諮問したり、あるいは特定の分野に精通しているものな

どを召して助言を求めるのは、曆にかぎったことではない。その一例をしめせば、『後漢書』列傳第三十六・郭躬傳「永平中。奉車都尉竇固出擊匈奴。騎都尉秦彭爲副。彭在別屯而輒以法斬人。固奏彭專擅。請誅之。顯宗乃引公卿朝臣平其罪科。躬以明法律。召入議。」

(33)

『漢書』卷二十一上・律曆志上。

(34)

大庭前揭書、四十八頁。

(35)

『續漢書』志第二・律曆志中・論月蝕。

(36)

永田前掲論文。『續漢書』から同様の例をひとつしめせば、志第九・祭祀志下「五官中郎將張純與太僕朱浮奏議……當除今親廟四。孝宣皇帝以孫後祖。爲父立廟於奉明。曰皇考廟。獨群臣侍祠。願下有司議先帝四廟當代親廟者及皇考廟事。下公卿博士議郎。大司徒涉議……」

(37)

注(10) 參照。

(38)

『續漢書』志第二・律曆志中・延光論曆「安帝延光二年。中謁者宣誦言當用甲寅元。河南梁豐言當復用太初。尚書郎張衡・周興皆能曆。數難誦・豐。或不對。或言失誤。衡・興參案儀注(者)。考往校今。以爲九道法最密。詔書下公卿詳議。大尉愷等上。侍中施延等議……甲寅元與天相應。合圖讖。可施行。博士黃廣・大行令任僉議。如九道。河南尹社・太子舍人李泓等四十人議……元和變曆。以應保乾圖三百歲斗曆改憲之文。四分曆本起圖讖。最得其正。不宜易。愷等八十四人議。宜從太初。尙書令忠上奏……冬至日直斗。而云在牽牛。迂闊不可復用。昭然如此。史官所共見。非獨衡・興。前以爲九道密近。今議者以爲有關。及甲寅元復多違失。皆未可取正……上納其言。遂(寔)改曆事。」引用文の校勘は王先謙『後漢書集解』にもとづく。(一)はそのなかの文字を省き、(二)はそのなかの文字を挿入することをしめす。後漢四分曆は一年の長さを三百六十五日四分の一とする四分曆(この名稱は一太陽年の端数が四分の一であることに由来する)で、曆計算の起點となる上元の干支は庚申の歲である。これにたいして甲寅元は同じ四分曆ではあるが、上元を甲寅の歲とした曆法で、これが名前の由来と

なった。九道については具體的にどのような曆法かわからないが、九道という語は月の軌道を意味しているから、當時、精度を高めつつあった月の運行にかなする知識を取り入れた曆法ではなからうか。

- (39) 『後漢書』からこの種の例をしめせば、列傳卷二十九・劉愷傳「安帝初、清河相叔孫光坐藏抵罪。遂增錮二世。譬及其子。是時居延都尉范滂復犯藏罪。詔下三公廷尉議。司徒楊震。司空陳寔。廷尉張皓議依光比。愷獨以爲……如今使藏吏禁錮子孫。以輕從重。懼及善人。非先王詳刑之意也。有詔。太尉議是。」

- (40) 引用文中で、CとFの兩方に名の記されている太尉劉愷については、Cでは三公のうちで太尉にもっとも権限があったために、主議者の代表として名があがっているのであり、彼自身の主張はFに見えるように太初曆の復活にあったと解釋すべきであろう。

- (41) 蔡邕『獨斷』「凡群臣上書於天子者有四名。一曰章。二曰奏。三曰表。四曰駁議。……其有疑事。公卿百官會議。若臺閣有所正處。而獨執異意者曰駁議。駁議曰。某官某甲議以爲如是。下言臣愚竊議異。其非駁議。不言議異。其合於上意者。文報曰某官某甲議可。『後漢書』からこの例をひとつしめせば、列傳第三十八・應劭傳「北軍中候鄒靖上言。烏桓衆弱。宜開募鮮卑。事下四府。大將軍掾韓卓議。以爲……鄒靖居近邊塞。究其應詐。若令靖募鮮卑輕騎五千。必有破敵之效。劭駁之曰。鮮卑隔在漠北。犬羊爲群……」

- (42) 『續漢書』志第二・律曆志中・喜平論曆・注「三月九日。百官會府。公殿下東面。校尉南面。侍中・郎將・大夫・千石・六百石重行北面。議郎・博士西面。戶曹令史當坐中而讀詔書。公議。蔡邕前坐侍中西北近公卿。與光・晃相難問是非焉。」

- (43) 後漢の秩制は十六等に分かれ、いわゆる大將軍・三公の萬石を頂點にして、中二千石、二千石、比二千石、千石、比千石、六百石、比六百石、四百石、比四百石、三百石、比三百石、二百石、比二百石、百石が石數であらわされ、さらにこの下に斗食・佐史があった。安作璋等

前掲書下冊・四四七頁以下「官吏的秩俸」を参照。

- (44) 『漢書』卷十・成帝紀「(建始)四年春……初置尙書員五人。」師古注「漢舊儀云……戶曹尙書主庶人上書事……」また『後漢書』應劭傳・注にも見ゆ。

- (45) 『續漢書』志第二十七・百官志四・司隸校尉「掌察舉百官以下及京師近郡犯法者。」司隸校尉の席次についてはつぎの史料から確認できる。同前・百官志四・司隸校尉・注引蔡質『漢儀』「司隸詣臺。廷議處九卿上。朝賀處公卿下。」、『通典』卷三十一・職官十四・司隸校尉にも同文見ゆ。また應劭『漢官儀』卷上「尙書令。秦官。銅印墨綬。與司隸校尉・御史大夫中丞皆專席坐。京師號曰三獨坐。言其尊重如此。」。許樹安『漢代司隸校尉考』(『文獻』第三輯、一九八〇)、安作璋等前掲書下冊・六頁以下「司隸校尉」を参照。

- (46) 侍中は前漢のとき加官で定員はなかったが、後漢になって少府に屬し、左右に顧問應對した。『續漢書』志第二十六・百官志三・少府「侍中。比二千石。本注曰。無員。掌侍左右。贊導衆事。顧問應對。法駕出。則多識者一人參乘。餘皆騎在乘輿車後。」侍中については安作璋等前掲書上冊・二八五頁以下「侍中」を参照。博士については、『續漢書』百官志二・太常「博士十四人。比六百石。本注曰……國有疑事。掌承問對。」大夫・議郎・郎將については、『續漢書』百官志二・光祿勳「光祿大夫。比二千石。本注曰。無員。凡大夫・議郎皆掌顧問應對。無常事。唯詔令所使。凡諸國嗣之喪。則光祿大夫掌弔。太中大夫。千石。本注曰。無員。中散大夫。六百石。本注曰。無員。諫議大夫。六百石。本注曰。無員。議郎。六百石。本注曰。無員。『應劭漢官儀』卷上「天子二十七大夫。職在言議。毗亮九卿。無員。多至數十人。」、『後漢書』紀第四・和帝紀・注「將謂五官及左右郎將也。大夫謂光祿・太中・中散・諫議大夫也。十三州志曰。大夫皆掌顧問應對言議。夫之言扶也。言能扶持君父也。」また郎將は光祿勳の屬に五官中郎將・左中郎將・右中郎將・虎賁中郎將・羽林中郎將があり、官秩はともに比

二千石である。嚴耕望「秦漢郎吏制度考」(國立中央研究院歷史語言研究所集刊)二十三本・上、一九五一)を参照。郎官と博士については、安作璋等前掲書上冊・附録「論秦漢郎官博士制度」を参照。

- (47) 漢代の九卿にかんする論文は多いが、少府と光祿勳の性格については、大庭前掲書、三十四頁―四十二頁、安作璋等前掲書上冊・八十五頁以下「諸卿」を参照。

- (48) 『文選』卷四十九・公孫弘傳贊・注引『益部耆舊傳』「武帝時。友人同縣譙隆薦閼待詔太史。更作太初曆。拜侍中。辭不受。」

- (49) 『漢書』と『後漢書』の天文學にかかわる記事をくらべてみると、つぎのようなちがいに氣づく。『漢書』では曆法そのものが單獨に語られることが少なく、常に占星術、災異理論、受命改制説などに結合・附會されていて、かならずしも科學的であるとはいえない。これにくらべ『後漢書』の記事は、曆そのものがひとつのテーマとして記され、しかも現代天文學の立場からもその科學性が首肯できる記事が多くなる。これは『漢書』と『後漢書』の著者の好み・記述の傾向を反映するものかもしれない。しかし、現實に後漢のほうが今日の意味での科學的精神や實證性が高かったと考えることもできよう。後漢になって改曆が官僚全體の關心となり公卿らの議に諮られるようになったこと、ならびに専門的な問題は太史に、改曆は廷議に下すという諮問の方法も後漢になってより明確に確立してくるよう、これらの點から見ると、前漢と後漢の曆にたいする態度にはたしかに違いがある。

- (50) 『續漢書』志第二・律曆志中・賈逵論曆。續漢志によるとこの論曆は永元四年のこととされ、『後漢書』列傳第二十六・賈逵傳に「永元三年。以逵爲左中郎將。八年。復爲侍中。領騎都尉」とある。賈逵論曆の天文學的意義については、戴內清「中國の天文曆法」(平凡社、一九六九)三十五頁以下「賈逵論曆とその科學的意識」を参照。

- (51) 『後漢書』列傳第四十九・張衡傳。

- (52) 『續漢書』志第二・律曆志中・熹平論曆および劉注。

- (53) 『後漢書』列傳第六十九下、儒林傳下。

- (54) 天文學の發展と災異や占星術の關係については今後の課題であらう。災異理論について上言し、光祿勳などの側近となった例も多く、曆の場合と同一の傾向が認められるようである。とくに災異についての諮問の事例は、前漢末から著しく多くなるようで、哀帝のとき、李尋ははじめ黃門に待詔していたが、洪水・地震についての下問に對えるなどして黃門侍郎に遷任している。翼奉もやはり引見・諮問・上疏を通じて、はじめに宦者署で待詔したのち、中郎をへて博士、諫議大夫になつてゐる(ともに『漢書』卷七十五本傳)。匡衡は元帝のときに日食・地震についての下問に答えて、光祿大夫となり、太子少傅に遷し、孔光は元壽元年正月朔日の日食についての下問に對えて、光祿大夫に任命され、給侍中として丞相につぐあつかいをうけてゐる(ともに『漢書』卷八十一本傳)。天變にかこつけて成帝を諫めた谷永も、はじめ公車に待詔してから、太中大夫となりついで光祿大夫に遷した(『漢書』卷八十五本傳)。後漢ではきわだつた例として、蔡邕「對詔問災異八事」(『蔡中郎文集』卷六)を指摘することができ。これには、蔡邕らが災異について密かに問われたさいの様子が記されている。その諮問の對象は、光祿大夫の楊賜、諫議大夫の馬日磾、議郎の張華、おなじく議郎の蔡邕、太史令の單飢の五人で、太史令をのぞけばみな光祿勳に屬した。このほか下問の場所が崇德署門内であつたことや、詔書を取り次いだのが中常侍であつたこと、下問に對えるにあたつて口頭ではなく支給された筆と硯で對を書いたなど、ふつうの諮問とことなる密問の具體の様子がうかがえて興味深い。

影山輝國氏は漢代の災異と政治の關係について、「西漢も宣帝以降は王族や名家の子弟によつて占められていた丞相の地位に、經書を習得した下級官吏出身者が就任するようになり、彼らによつて災異思想が盛んに宣傳され」、「災異理論は内朝に奪われた權力を皇帝及び外朝に取り戻すための有力な理論的根據として見直され、引用されはじめ

た」と分析された。影山輝國「漢代における災異と政治」(『史學雜誌』九〇—八、一九八一)、日原利國「災異と讖緯」(『漢代思想の研究』所収、研文出版、一九八六)を参照。

(55) 『宋書』卷十一・律曆志中の元嘉改曆についての記事、『隋書』卷十八・律曆志下の皇極曆、および『唐書』卷二十五・律曆志一の戊寅曆改正の記事を参照。

(56) 上元とは、曆の計算の起點(epoch)となる歳をいい、積年はその上元からの年數をいう。ふつう中國の曆では、上元を何萬年、何十萬年も上古にさかのぼらせることがおこなわれてきた。巨大な數値になる上元・積年を導入すると、曆計算は多少煩雜になるが、曆法自體にはなんら本質的影響をあたえない。後漢の改曆の議論は、たとえば、後漢四分曆の庚申元が『春秋元命苞』『乾鑿度』に附會され、後漢四分曆に對抗した甲寅元が『春秋命曆序』『尚書考靈曜』に附會されたように、上元となる歳の干支が緯書に明文があるかどうか、議論のおもな焦點となっている。

沒日は、一年三六五日餘を二十四節で等分すると、節氣と節氣のあいだの平均日數は十五日餘となる。端數を切捨て、一節の日數を十五日ちょうどとすると、二十四節で三百六十日となり、一年の日數と五日餘の差を生じる。これを沒という。この五日餘を一年の日數で割って各日に分配し、その値を毎日累積していつて、一日に達した日を沒日と呼ぶ。

土用は、五行を一年に配分するもので、春(木)・夏(火)・秋(金)・冬(水)の各三カ月のおわりの十八日餘を土に配當する。沒日も土用もどちらも曆計算に必須のものでなく、曆注や年中行事にかかわるものである。

(57) 曆と緯書については、新城新藏「緯書と殷曆」(『所謂天地開闢の年代と緯書』《東洋天文學史研究》第二篇および第七篇、弘文堂、一九三二)、武田時昌「緯書曆法考」(山田慶兄篇『中國古代科學史論』、京都大學人文科學研究所、一九八九)。